

2021. 9. 12 (日) マタイ26:63~68

26:63 しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司はイエスに言った。「私は生ける神によっておまえに命じる。おまえは神の子キリストなのか、答えよ。」

26:64 イエスは彼に言われた。「あなたが言ったとおりです。しかし、わたしはあなたがたに言います。あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」

26:65 すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「この男は神を冒瀆した。なぜこれ以上、証人が必要か。なんと、あなたがたは今、神を冒瀆することばを聞いたのだ。」

26:66 どう思うか。」すると彼らは「彼は死に値する」と答えた。

26:67 それから彼らはイエスの顔に唾をかけ、拳で殴った。また、ある者たちはイエスを平手で打って、

26:68 「当ててみる、キリスト。おまえを打ったのはだれだ」と言った。

<説教>

(イエスがユダヤの最高法院(サンヘドリン)で裁判にかけられている場面の続きです。)

この裁判は、裁く側のサンヘドリンが〈イエスに不利な偽証を得ようと〉してまで〈イエスを死刑にするため〉(59)の、初めから不正、不法、でたらめな裁判でした。

公正な裁判をお命じになっている神の律法にも、もちろん反するものでした。

〈多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られ〉ず(60)、最後の二人のやはり悪意ある証言についても証言が一致しませんでした(マルコ 14:59)。

裁判長である大祭司が「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているのは、どういうことか。」(62)と尋ねましたが、そんなご自分に〈不利な証言〉に対し〈イエスは黙っておられ〉ました(63)。

こうして被告人(イエス)の言葉尻をとらえることもできず、そもそも被告人の弁明が得られないというのではさすがに裁判という格好すらつかないということでしょうか、大祭司はイエスに、「私は生ける神によっておまえに命じる。おまえは神の子キリストなのか、答えよ。」(63)と命じました。

もちろん大祭司はイエスが本当に〈神の子キリスト〉なのかどうか確かめようとして一本当にそうだと確認できたなら無罪判決にしようと思って一言ったのではありません。

ましてやあわよくばイエスを信じようなどとは全く考えてはいませんでした。

大祭司やサンヘドリンは、イエスが〈神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされ〉(ヨハネ 5:18)ていたことも知っており、それ故に〈イエスを殺そう〉(同)と既に決めていたのです。

また、既にイエスを〈悪霊どものかしら〉〈ベルゼブル〉と決めつけてもいました。

それで、大祭司がイエスにわざわざ聞いたのは、そのように問えばきっとイエスはこう答えるに違いないと思ったからでしょう。

果たしてそのとおりとなりました。

〈イエスは彼に言われた。「あなたが言ったとおりです。しかし、わたしはあなたがたに言います。あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲

とともに来るのを見ることになります。』(64)

「あなたが言ったとおりです。」と、イエスはご自分が〈神の子キリスト〉であることをはっきりと公言しお認めになりました。

「今さら何を聞いているのか。あなた自身、わたしのこれまでの言葉と行いのことはよく知っているはずではないか。」とイエスは大祭司を恐れることなく、その顔色をうかがうことなく、むしろ彼を“突き放す”勢いで、ご自分が〈神の子〉つまり神と等しいお方、神ご自身一であり、神の約束の〈キリスト〉つまり「メシヤ」、王・祭司・預言者として神から油注がれた者、力ある救い主、支配者一であることを告白し、証し（証言）なさったのです。

もちろんイエスはこのように答えることで、大祭司たちの狙いどおりとなってご自分の身に苦難と死を招くことになることを知っておられました。

しかしたとえそうであっても、ついさっきとは違って、ここでは〈黙っておられ〉るわけにはいきませんでした。

〈あなたが言ったとおり〉わたしは〈神の子キリスト〉だとはっきりと人の前で告白し、証言しなければならなかったのです。

そのようにして十字架の苦難と死に向かうことが、父なる神のみこころだったからです。

そして、そのようにしてイエスは〈人々の前でわたしを認める〉(10:32)ことの模範を私たちにお示しにもなったのです。

更になおイエスは続けて、「しかし、わたしはあなたがたに言います。あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」と言われました。

「しかし」という言葉には、「あなたが言ったとおり、わたしは神の子キリストです。あなたは今まででもそうは信じなかったし、今あなたがたが見ているわたしの弱々しく惨めな姿からはますます信じられないでしょうが」という感じがあります。

「しかし…あなたがたは今から後に、…見ることになる」イエス一〈神の子〉(神)であり同時に〈人の子〉(人間)であるお方一の姿とは、「力ある方の右の座に着き」(詩篇 110:1)、「天の雲とともに来る」(ダニエル 7:13)お姿です。

それは「敵を…足台とする」(誌 110:1)、「右におられる主は御怒りの日に王たちを打ち砕かれる」(同 5)、「国々をさばき…首領を打ち砕かれる」(同 6)のであり、「この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」(ダニエル 7:14)、そういう絶対的主権者、王、審判者としてのお姿なのです。

「〈今から後に〉は、審判する側とされる側が全く逆転するのだ。」「〈今〉も〈後〉も変わらず〈神の子キリスト〉であるわたしを信じないあなたがたへの神の審判は〈今〉始まっているのだ。」「〈今から後に…見ることになります〉が、その時では遅すぎる。そのことを〈今〉〈見る〉べきです、知るべきです。」そうイエスは証しなさったのです。

しかし、〈大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「この男は神を冒瀆した。なぜこれ以上、証人が必要か。なんと、あなたがたは今、神を冒瀆することばを聞いたのだ。どう思うか。」すると彼らは「彼は死に値する」と答えた。〉(65,66)

イエスはご自分に対する悪意ある中傷やののしりには黙っておられましたが、ことご自

分がどんなお方であるか、ご自分がこの地上でなさるべきお働きと語るべきみことばについては決して黙ってはおられず、神に全く従い、神のみこころを語り行われました。

そのイエスの全く真実な証言を、ユダヤの〈最高法院全体〉は〈神を冒瀆した〉言葉として最高に悪く、ねじ曲げて聞き、断罪し、ここでもイエスを拒絶したたのです。

〈それから彼らはイエスの顔に唾をかけ、拳で殴った。また、ある者たちはイエスを平手で打って、「当ててみる、キリスト。おまえを打ったのはだれだ」と言った。〉(67,68)

「打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。」(イザヤ 50:6) と書かれているとおり、イエスは再び黙っておられました。

それは本当の「神冒瀆者」である私たちのために十字架で死なれるためでした。

私たちは〈今〉「全能の父なる神の座したまいつつ、かしこより来たりて生ける者と死にたる者とをさばこうとしておられる」主イエス・キリストを信じ、証しすべきです。